

# 漢語「悲観」についての考察

## — 中日語彙交流の視点から —

胡 新 祥

### 1 はじめに

現代中国語と日本語において「悲観」はいずれも「物事が思うようにならないため失望すること」という意味を表わす。一方、仏教にも「悲観」という言葉があって、「あわれみいたむ心で衆生を見て、その苦を取り除くこと」という意味である。一部の先行研究では、「悲観」(失望する)を近代新漢語と見なしつつ、その由来を仏教用語の「悲観」に求めている。しかし、両者の間に意味の差があまりにも大きすぎて、「悲観」は一体どうやって仏教用語から近代新漢語へと変貌を遂げたか、大変興味深いところである。

そして、筆者はかつていくつかの仏教由来新漢語を考察したことがある。仏教由来新漢語の成立に関して、「まず古代漢語、あるいは古典日本語において一般語化されなければならない」という仮説を立てた。よって、本稿では両国の豊富な言語資料を利用して、中日語彙交流の視点から、「悲観」(失望する)の語誌を究明する一方、仏教由来新漢語の成立仮説を検証してみたいと思う。

### 2 辞書記述

「悲観」の由来を探るために、筆者はまず中国の『漢語大詞典』(一九八六)と日本の『日本国語大辞典第二版』(二〇〇二)を確認した。

【悲観】①**仏教語**。五観之一。謂以慈悲之心觀察衆生，救人苦難。《法華經・普門品》：“悲観及慈観，常願常瞻仰。”注“以大悲人観衆生苦，拔其苦難，名曰悲観。”②**消極失望**。和“**樂觀**”相對。馮雪峰《上饒集中營》第三部“不是面對着屠殺而悲観，而是進行有準備的、有希望的戰鬪。”巴金《隨想錄》五：“我絕不悲観，我要爭取多活，我要為我們社會主義祖國工作到生命的最後一息。”<sup>(1)</sup>

(『漢語大詞典』 一九八六)

(1) この世や人生は、悪と苦に満ちた悲しむべきものであると観ずること。厭世観を起すこと。

\*野分〔一九〇七〕〈夏目漱石〉七「悲観する癖があるんです」

(2) 悲しんで失望すること。前途の望みを絶つこと。

\*徹〔一九一一〕〈徳田秋声〉七〇「その度(たんび)に夫婦はわが子の病勢を悲観したり」

\*作戦要務令〔一九三九〕一・一五「状況を悲観し或は敵情を過大視し」

(3) 仏語。あわれみいたむ心で衆生を見て、その苦を取り除くこと。

\*妙一本仮名書き法華經〔鎌倉中〕観世音菩薩普門品「真観・清浄観・広大智恵観・悲観(ヒクワン〈注〉カナシミノクワン)、および慈観あり」<sup>(2)</sup>

(『日本国語大辞典第二版』 二〇〇二)

(2)

両辞書の記述によると、「悲観」は元々仏教五観<sup>(3)</sup>の一、仏教における本義は「あわれみいたむ心で衆生を見て、その苦を取り除くこと」である。また「悲観」の仏教由来説に関して、中国の『俗語佛源』(二〇〇八)<sup>(4)</sup>も同じことを主張している。

しかし、「失望する」を意味する「悲観」は日本語においても中国においても歴史が浅いように思われる。『日本国語大辞典第二版』(二〇〇二)の記述を見る限り、「悲観する癖があるんです」(夏目漱石『野分』一九〇七)が一番早い。一方、『漢語大詞典』(一九八六)に出された『上饒集中營』は馮雪峰が一九五一年に書いた映画の台本であり、『随想録』は文学巨匠である巴金氏(一九〇四～二〇〇五)が晩年に書いた作品である。

現代日中両国語における「悲観」(失望する)は仏教からの借用語ではないかという印象を持たれてしまう。しかし、仏教における本義の「衆生を救う」と現在の「消極、失望」との間に、あまりにも意味の差が大きすぎるため、一体どうやって現在の意味に辿り着いたか、大変興味深いところである。

### 3 先行研究

上記の問題点を受けて、筆者はまず中国の近代新語を専門的に取り扱う著書をいくつか調べた。その結果、『漢語外来語詞典』(一九八四)、そして『近現代辞源』(二〇一〇)では下記の記述を確認できた。

悲観 beiguan 对事物的發展采取消極的看法。〔源〕日 悲観 hikan 〔〈古代漢語〉《法華經・普門品》：‘悲観及慈観，常願常瞻仰’ 意識英語 pessimism〕<sup>(5)</sup>

(『漢語外来語詞典』 一九八四)

悲観 beiguan 精神退廢，对事物的發展欠乏信心。(跟“樂觀”相对)。1903汪榮宝等《新爾雅・釈教育》：“以世人之挙動，皆無意識而陷於苦境者，謂之悲観主義。”1904梁啓超《論俄羅斯虛無党》：“渣尼斜武忌氏，著一小説，名曰《如之何》，以厭世之悲観聳動全国。”<sup>(6)</sup>

(『近現代辞源』 二〇一〇)

『漢語外来語詞典』(一九八四)は仏教由来説を支持しつつ、「〔源〕日 悲観 hikan」とあるように、現代中国語における「悲観」は日本語から輸入されたものと主張する。一方、『近現代辞源』(二〇一〇)に挙げられた『新爾雅』にせよ、「論俄羅斯虛無党」にせよ、いずれも二十世紀初期のものである。実は『新爾雅』と『論俄羅斯虛無党』における「悲観」そのものが日本語から借用してきた可能性が高い。

沈国威『新爾雅 附解題・索引』(二〇一一)によると、『新爾雅』は中国人日本留学生による新語詞典であり、主に人文、自然科学の新概念を表わす学術用語を収録する。そして、新語の多くは日本語から借用してきたものである。

通過下面的考察，我們基本上可以肯定：《新爾雅》一書是对日本書籍的翻譯或改編。但是，我們現在還無從考証本書的底本究竟為何書。<sup>(7)</sup>

(『新爾雅 附解題・索引』 二〇一一)

一方、「論俄羅斯虛無党」<sup>(8)</sup>は梁啓超が一九〇三年に日本で書いた文章である。梁啓超がどんな資料を参考にしてこの文章を書いたかは不明であるが、「論俄羅斯虛無党」に日本語の影響が随所見られる。例えば、文中の「虚無」について、楊森林（二〇一五）によると、虚無主義そのものが二十世紀の初め頃、日本経由で中国に入ったのである。さらに楊哲（二〇一六）では、題目にある「虚無党」という言葉は日本語から借用してきたものと指摘した。いずれも間接的な証拠であるため、はっきりと断言できないが、上記のことを考えると、「論俄羅斯虚無党」のなかの「悲観」も梁啓超が当時の日本語から借用した可能性が高いと思われる。

虚無主義話語在20世紀初進入中国。最初進入中国的虚無主義話語主要是俄国虚無主義，渠道却主要是日本传入。<sup>(9)</sup>

（「虚無主義的歷史流变与当代表現」 二〇一五）

19世紀70年代末，Nihilist 传入日本。1878年11月，明治時期的報紙《東京曙新聞》在介紹俄国暗殺事件時將暗殺者称为“虚無党”。……或可判定：1880年代左右，“虚無党”已經作為 Nihilist 的日文対訳詞在日本流传開來。<sup>(10)</sup>

（「“虚無党”話語在中国：從传入到傳播（1900～1930）」 二〇一六）

#### 4 中国の漢訳洋書と英華字典における「悲観」

上記のように、「悲観」は元々仏教用語であり、近代日本語において新しい意味が付与され、二十世紀の初め頃また中国に逆輸入された「回遊詞」のように思われる。しかし、周知のように、中国の前期漢訳洋書と英華字典は日本の近代漢語の成立に大きく寄与した。そのため、筆者はまず Masini 著、黄河清訳『現代漢語語彙的形成——十九世紀漢語外来語研究』（一九九七）における「悲観」の有無を確認した。なぜかという、本書は数多くの漢訳洋書を調査し、一八九八年までの中国語における新語、訳語を網羅的に考察した。Masini の考察によって、一部の新語に関する日本由来通説が覆されてしまう。本書の「付録2：十九世紀文献中的新詞詞表」「付録3：詞表中的英日詞語索引」を確認したところ、「悲観」もなかったし、また「Pessimism」「Pessimist」「Pessimistic」もなかった。

次に来華宣教師たちによる英華字典を調査した。調査結果は下記の通りである。

	Pessimism	Pessimist	Pessimistic
馬禮遜 1822	×	×	×
衛三畏 1844	×	×	×
麥都思 1847～48	×	×	×
馬禮遜 1865	×	×	×
羅存德 1866～69	×	以諸事不樂者	×
盧公明 1872	×	×	×
鄭其照 1899	×	×	×
顏惠慶 1908	世事皆惡說、哀觀主義、厭世教	倡世事皆惡說之人、厭世家、奉哀觀主義者	×
赫美玲 1916	世事皆惡說（新）、哀觀主義（新）、厭世論派（部定）、 <b>悲觀主義（新）</b>	<b>悲觀人</b> 、厭世家、哀觀人（新）	<b>悲觀（新）</b> 、厭世、哀觀（新）

(4)

上記のように、Robert Morrison、Walter Henry Medhurst、Wilhelm Lobscheid などの来華宣教師による英華辞典に「悲観」が見つからなかった。「悲観」が初めて中国の英華辞典に登場したのはドイツ人 Hemeling, Karl E. G. の『官話』（一九一六）である。『官話』は一九一六年に出版されたものであるし、また「悲観主義（新）」「悲観（新）」のように、「新」のマークがついている。沈国威（二〇一〇）によると、『官話』のなかの新語は日本語から借用されたものが多い。

現代詞語（modern terms）主要来自古典漢語和日語。用“新”標出。

《官話》的新詞来自何処？赫美玲說“主要来自古典漢語和日語”，從造詞的角度看，主要貢獻者應該是來華傳教士和日本人。<sup>(11)</sup>

（『近代中日語彙交流研究 漢字新詞的創制、容受与共享』 二〇一〇）

こう見ると、現代中国語における「悲観」は確実に二十世紀の初め頃、当時の日本語から借用されてきたものと判断できる。筆者はかつていくつかの仏教由来新漢語を考察した。なぜ仏教用語が近代新漢語になれるかについて、一つの仮説を立てている。それはまず古代漢語、あるいは古典日本語において一般語彙となったことである。一般語彙というプロセスがなければ、仏教における本義と近代的な概念とは繋がらない。「悲観」に関して、「あわれみいたむ心で衆生を見て、その苦を取り除くこと」という意味から直接「悲しんで失望すること」になれるとは考えにくい。

## 5 仏教用語の「悲観」

仏教用語にあったから、これは仏教から借用してきた新漢語であるという論はしばしば見かける。「悲観」についても、『漢語外来語詞典』（一九八四）、『漢語大詞典』（一九八六）、『俗語佛源』（二〇〇八）などは仏教由来説を唱えている。しかし、筆者から見ると、一般語彙というプロセスがなければ、仏教借用語ではなく日本人の手による和製漢語であると見なすべきである。よって、この節では仏教文脈における「悲観」に触れつつ、古代漢語、古典日本語における「悲観」の有無を考察する。

仏教用語の「悲観」に関して、筆者は「SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース2018版」（以下は「SAT 2018」と略称する）を利用して調査を行う。「SAT 2018」では文字列としての「悲観」は四五四回ヒットできた。そのうち、独立語としての「悲観」は下記用例（1）のように、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』に初見する。

(1) 眞觀清淨觀，廣大智慧觀，悲観及慈観，常願常瞻仰。

（鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』 四〇九年前後）

(2) 由二是昔願一思二-惟佛法一皆悉現レ前。而起二大悲一観三-察世間。

（『方廣大莊嚴経』 第五卷 唐）

(3) 一切如來應正等覺本以大悲観有情類。

（『大般若波羅蜜多経』 第二百二十九卷 唐）

それで、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』の「悲観」は用例（2）（3）が示しているように、「大悲を以て観察する」に由来する。「悲観」は仏教用語に成れたのは、あくまでもフレーズを凝縮したもの

だけであり、言語学の視点からその語構成を分析できない。これは古代漢語にある「樂觀」とは性格が違う。「而白圭樂觀時變」(司馬遷『史記・貨殖列傳』前漢)、「故吾少而樂觀焉」(韓愈「送王秀才序」唐)のように、古代漢語のなかの「樂觀」は「よく、喜んで観る」という意味を表わす「偏正結構」である。

(4) 況楚之諸士司多安曾有狐兔之悲觀望成敗以為順逆故。

(『兩朝從信録』明崇禎刻本)

(5) 徒歩而往時方隆冬路遇大雪跋涉三千餘里足脛皴裂至其地得見父而喜繼之以悲觀者無不感動。

(『道光冠県志』清道光十年修)

上記用例(4)、(5)のように、古代漢語には「悲觀」があったものの、一語として成りえなかった。(4)は「有狐兔之悲、觀望成敗」(狐、兔のような悲しみがあって、成敗を観る)、(5)「得見父而喜、繼之以悲、觀者無不感動」(漸く父に会え、喜び過ぎて涙が出た。見る者は感動せざる者は無し)。このように、古代漢語において「悲觀」は一般語彙に成れなかった。さらに日本古典文学全集、東京大学史料編纂所の古文書をも調査したところ、一般語彙としての「悲觀」は見つからなかった。

古代漢語と古典日本語において「悲觀」が一般語彙として使用された痕跡が一切なくて、これで果たして現代中日両国語における「悲觀」は仏教から借用してきたものと言えるか。

なぜなら「あわれみいたむ心で衆生を見て、その苦を取り除くこと」という仏教の本義は「悲しんで失望すること」とはあまりにも意味の差が大きすぎるためである。仏教から借用してきたものというより、「悲しく観る、感じる」という日本人の漢字意識による和製漢語であると考えたほうが自然ではないか。

## 6 和製漢語の「悲觀」

和製漢語としての「悲觀」について、筆者は『明治のことば辞典』(一九八六)、『明治大正新語俗語辞典』(一九九六)、『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』(二〇〇二)、『現代に生きる幕末・明治初期の漢語辞典』(二〇〇七)などいくつかの資料を調べてみたが、いずれも収録していない。そして、筆者が調査した範囲で、「悲觀」(失望する)の使用例として下記の用例(6)が一番早かった。

### (6) 第四 悲觀

①大なる思想を有せる哲学者・大悟者を觀するに、渠等は皆な人世を悲觀せし。…中略…、渠等の形体は窮愁、失望、不平、冷情等に困まれ、攻められ、苦しめらるる一個懷疑の動物と成り果つるに至れり。

②渠等が人世を悲觀せし一の大なる反動論者なるを察し。

③渠等が万斛の不平を瀝きたる熱涙にして、人世を悲觀せし。

④亦た幾分か悲觀的消息を伝へし者と謂ふべし、記して茲に到れば総ての渠等が悲觀の念は常に胸臆に往来して。

⑤豈に自ら悲觀の人たる可けむや。

(武市雄図馬『希望』一八九一)

(6)

(7) 悲観的にして実動的

露西亞の殖民は、渺たる蒼海の一粟、天然の無窮を歎じ、自己の微弱なるを悲まざるを得ざる也。

(平田久『露西亞帝国』 一八九五)

(8) 快観派と悲観派

世には快観派あり、悲観派あり。快観派の眼は、光明なる反面に注ぎ、悲観派の眼は噫黒なる反面に注ぐ。

(徳富猪一郎『静思余録』 一八九五)

(9) 詩人の悲観

①人世の蹉跎、詩人をして悲観厭世に陥らしむるもの、古今皆然り。

②をや「味きなき浮き世」を觀じ「かげろうの身」の定めなきを感ずるは、固よりその處なりけるなり。

(緑亭主人『紫式部』 一八九六)

(10) 政治及社会上の悲観

慨世憂國の人は悲観を積極的に解す、故に一片の赤誠發して時代改革の声となり。

(永田新之允『小野梓』 一八九七)

(11) 何故に厭世悲観するや

既に人を頼みにしなければ仕事の出来ぬ様な奴では、假令厭世悲観に流れすとも多くの仕事を成し得ぬ奴等だ。

(川村八郎『虚心談』 一九〇〇)

上記の用例(6)～(11)を見ると、近代日本語における「悲観」は明らかに「～～を悲しく観る(感じる)」という日本人の漢字意識による和製漢語である。一方、仏教用語の「悲観」は「あわれみいたむ心で衆生を見て、その苦を取り除くこと」の意味を表わし、両者の間に影響関係が見られない。

和製漢語の「悲観」は偶々仏教用語の「悲観」と字面を一致しているため、一部の先行研究では仏教借用語と認定されてしまう。ここで改めて仏教由来新漢語の生成仮説を提起してみる。仏教由来新漢語成立の必須条件は古代漢語、あるいは古典日本語において一般語彙に転用されること、この過程がなければ仏教における本義と近代的な概念とが繋がらない。

上記の仮説を説明するために、仏教由来新漢語の一例を挙げておく。筆者(二〇一九)<sup>(12)</sup>は医学用語の「障碍」を考察した。結論を言うと、「障碍」は仏教の中国伝来に伴って造語された言葉であり、「修業、悟りの邪魔、妨げ」という意味を表わす。古代漢語においても古典日本語においても一般語化され、「邪魔、妨げ、障り」といった意味である。一般語化された「障碍」は蘭和字典ではオランダ語の「hinder」「hinderen」「hindernis」などに対訳された。緒方洪庵は医学訳書『扶氏經驗遺訓』(一八五七)でこの対訳関係を利用して、「障碍」を医学用語として成立させたのである。

(12) 原由 近因ハ心肺ノ運営遏止シ若クハ脱衰セル者ニシテ神經運営為ニ其障碍ヲ被ムレルナリ昏冒ト卒中トノ區別実ニ茲ニ存セリ即昏冒ハ血行ノ障碍ニシテ其因心ニ在リ卒中ハ神經ノ障碍ニシテ其因腦ニ在リ。

(緒方洪庵『扶氏經驗遺訓・卷之十一』 一八五七)

(13) 又患器ノ官能久ク障碍ヲ被リ分泌液常態ヲ違ヘル等ヲ以テ之ヲ察シ或ハ面色灰白帶黄等ノ悪液証ヲ見ハシ

(緒方洪庵『扶氏經驗遺訓・卷之二十三』 一八五七)

そして、近代日本語における「悲観」の使い方を見ると、動詞の「悲観する」、名詞の「悲観」、そして形容詞の「悲観的」の三通りに分かれる。後ほどの近代中国語ないし現代中国語に対する影響から、「悲観的」という表現について少し説明を添える。この「的」は形容詞化接尾辞であり、その役割は前置の「悲観」を形容詞化することである。形容詞化接尾辞の「的」はまさに近代日本語において生み出されたものである。

名詞、特に抽象的な意味を表わす漢語の名詞や体言的な語および句について、体言、または形容動詞語幹をつくる。中国語の助辞の用法にならって、明治初期の翻訳文のなかで、英語の tic などの形容詞的な語の訳語として二字の漢語につけて用いられ出してから、学術的な文章などに多く用いられる。

(『日本国語大辞典第二版』 二〇〇二)

一方、近代新漢語のソースとなるいくつかの英和辞書をも調査したところ、『英和对訳袖珍辞書』各版、『附音插图英和字彙』各版には、「Pessimist」の訳語として挙げられたのはいずれも「常二萬事ヲ歎ク人」というフレーズであり、「悲観」は見当たらなかった。そして、数々の新漢語を生み出した『哲学字彙』の初版と再版には「悲観」が見当たらず、「Pessimism」の訳語として「厭世教」が挙げられている。一九一二年の三版に至ってようやく「厭世教、厭世主義、悲観論、多苦論、皆苦論」のように、「悲観」が見え始めた。しかし、当時の日本語において「悲観」は既に定着していたのである。

## 7 中国語における「悲観」の受容と変貌

上記のように「悲観」は近代日本語において、「～～を悲しく観る(感じる)」という漢字意識で新しく造語された和製漢語である。「悲観」の中国での受容と変貌に関して、筆者は『申報』(一八七二年四月三十日発刊、一九四九年五月二十七日廃刊)、『晩清、民国時期期刊全文数据库』を中心に調査した。

### 7.1 名詞から形容詞へ

下記用例(14)のように、『申報』における最初の「悲観」(失望する)は一九〇六年九月二十二日である。それまでの三十五年間のあいだ、「悲観」はわずか四回しか登場しなかった、しかもいずれも仏教の文脈である。

(14) 於内地多設劇台宜取廉價，宜多演国家受侮之悲観，宜多演各国亡国之惨状，凡一切淫靡之劇黷，無庸一切牛鬼蛇神迷信之劇黷。

(論戲典改良與群治之關係『申報』一九〇六年九月二十二日)

(15) 題目：三原胡君堪來書(附“陝西学界之悲観”條弁)

(8)

〔夏声〕（東京） 一九〇八

(16) 題目：紀海軍過去歴史之悲觀

〔広益従報〕 一九〇九

現代中国語において「悲觀失望」「雖然實驗失敗了，但他併不悲觀」のように、「悲觀」は形容詞として位置づけられ、「国家受侮之悲觀」「学界之悲觀」「過去歴史之悲觀」のような名詞的な使い方はない。しかし、『申報』のみならず、二十世紀初期の中国語資料に「～～之悲觀」のような名詞的な使い方が一般的に存在していた。例えば、『晚清、民国时期期刊全文数据库』における「悲觀」の最初の五十例を見ると、「～～之悲觀」が四十例でなんと八割を占めている。さらに「～～之悲觀」の形ではないが、下記の用例 (17)、(18) ように「悲觀」は現代中国語の感覚とは違い、明らかに名詞として意識されている。

(17) 若夫諮議局者，為法定之民選機關，与国家相終始者也。非如自由結合之团体，可以隨時解散者可比。倘有決裂則国家将与之同陷於悲觀。

（対湖南諮議局之言『申報』 一九〇九年八月二日）

(18) 考其成績則議案哀然成巨冊，高数寸許而已，他無有也。是則今年開局度回憶去年今日，必有種種悲觀。

（今年諮議局之觀念『申報』 一九〇九年十月二十五日）

下記用例 (19)、(20) のように、中国では「難進」「難看」「難辦」「樂觀」などの「偏正結構」を成す言葉は形容詞、もしくは動詞に成れるが、名詞には成れない。それでは、なぜ二十世紀初め頃の中国語資料に中国語の文法としては成り立たない名詞の「悲觀」が大量に存在していたのか。これは当時日本語の中の「露国民心の悲觀」（朝日新聞 一九〇四年七月四日）、「牛莊貿易の悲觀」（朝日新聞 一九〇四年九月十日）、「露国新聞の悲觀」（朝日新聞 一九〇五年二月十九日）をそのまま真似したものと考えられる。

要するに、和製漢語の「悲觀」の中国輸入に伴い、日本語で成立した用法も当時の中国語にもたらされてきた。しかし、中国語の既存文法体系と齟齬が生じてしまうため、一時盛んに使われていた「悲觀」の名詞的用法は次第に消滅してしまう。いわゆる全般受容から中国語化という現象であろう。

(19) 其实我对中国当代虚構文学（或文学虚構）倒没有那麼悲觀，相反，還之樂觀其成。

（虚構是文学的生命所在『人民日報』 二〇一一年七月二十九日）

(20) 此外，群衆反映我們的一些執法部門“門難進，臉難看，事難辦”，一些幹警執法中存在一種對群衆“冷、硬、橫”的錯誤態度。

（努力建設有中国特色的社会主义民主政治『人民日報』 二〇一二年六月二十七日）

## 7.2 「悲觀的」

現代中国語において形容詞の「悲觀」が名詞を修飾する時に、「悲觀情緒」「悲觀結論」のように、直接被修飾名詞の前に来ることもあるし、また「悲觀的情緒」「悲觀的預測」のように、「悲觀的」の形を取ることもよくある。注意を払うべきなのは、この「的」は中国語に広く一般存在

している結構助詞<sup>(13)</sup>の「的」（“我的意見”など）とは違い、近代日本語に成立した形容詞化接尾辞の「的」の名残りである。

既に述べたように、形容詞化接尾辞の「的」は明治初期の翻訳文のなかで、英語の接尾辞の tic などに由来する。抽象的な意味を表わす漢語の名詞について形容動詞語幹を作る役割を果たす。稲垣智恵（二〇一〇）によると、中国の白話文運動に当たって日本語由来の接尾辞の「的」が大きな論争を引き起こした。

我想為甚麼想起把『的』『底』兩字、在白話文裏『分職』呢？就因為『日本文輸入』我們已經用得熟而又熟底一個『的』字、這個『的』字用法在日本是因為翻譯西文底需要、才創出來底、不但在中國『大可補文言之缺點……文言所不及』就在中國白話裏和其他一切習用底『的』字、意味迥然不同、例如『自然的』『理想的』『利己的』『利他的』『紳士的』『平民的』……

（止水「答『適之』君『的』字」（『晨報』1919年11月13日）7面）<sup>(14)</sup>

しかし、中国語には従来より「結構助詞」の「的」が存在しているため、日本語由来の形容詞化接尾辞の「的」が輸入され、逆に文の意味を混乱させてしまうことがしばしば見受けられる。例えば、「科学的研究」は「科学を研究する」という意味なのか、それとも「科学的方法で研究する」という意味なのか、混乱を生じてしまう。ほかの理由もあって、結果的に形容詞化接尾辞の「的」が次第に従来の「結構助詞」の「的」に同化されてしまい、現代中国語のなかで定着に至らなかったが、一部の抽象名詞に関して形容詞化接尾辞の「的」がなお存在している。

“理想的工作”，…中略…、この構造は「形容詞＋助詞＋名詞」の成分と共に、「名詞＋形容詞化接尾辞＋名詞」の成分を保ち続けているとするのは間違いではない。その意味では、現在でも“的”に一部形容詞化接尾辞の機能が残っているといえる。<sup>(15)</sup>

大変面白いことに、現代中国語における「悲観的情緒」「悲観的予測」のなかの「的」は、まさに日本語由来の形容詞化接尾辞「的」の名残りの好例である。筆者の調査によると、『申報』における「悲観的」の初見は一九一〇年十月二十五日、ほかの新聞紙でも大体一九一〇年頃から「悲観的」が見え始める。ただし、『申報』では一九一〇年から一九一九年にかけて、「悲観的」という表現はあくまでも少数派であり、一九二〇年以降ようやく定着していた様子を見せていた。

(21) 今年各省諮議局。開局吾知各議員必具有兩種之觀念。一種悲観的。…中略…、一種樂觀的。  
（今年諮議局之觀念『申報』一九一〇年十月二十五日）

(22) 悲観的人兒，大約總有：流不尽的熱淚，唱不完的哀歌。  
（小詩「学生文芸叢刊匯編」陳伯符 一九一一）

ここで接尾辞の「的」にかなりの紙幅を割いたのは、まず現代中国語における「悲観的」という表現の由来を究明するためである。その次は賀陽『現代漢語欧化語法現象研究』（二〇〇八）<sup>(16)</sup>のように、一部の中国語研究者は中国語の欧文化現象を論じる時に、近代日本語の影響を無視しているためである。この傾向に対して、陳力衛（二〇一八）は「漢語欧化過程中的日語因素」<sup>(17)</sup>という文章を起した。

(10)

### 7.3 動詞の「悲観」

和製漢語の「悲観」は「～を悲しく観る（感じる）」という漢字意識で造語されたものであるため、日本語のなかでは、「～を悲観する」という使い方は自然であろう。現代日本語における「悲観」の使用状況を把握すべく、筆者は「朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱビジュアル」から最新の一〇〇例を抽出した。

他サ動詞	造語成分			名詞
悲観する	悲観的	悲観論	悲観主義	悲観
44例	29例	7例	1例	19例

当然のように、動詞の「悲観する」が四十四例で、ほぼ半数を占めている。さらに言う「悲観はしなかった」「決して悲観はしていない」のように、形だけは名詞であるが、実質的に動詞と見なすべき例文は九例もある。これで動詞の「悲観する」がさらに増えることになってしまう。

朝日新聞での調査と比較するために、中国の「人民日報図文データ全文検索系統」を利用して同様の調査をも実施した。結果を言う、現代中国語において「悲観」は一律形容詞と規定されていて、動詞の用法は見当たらない。

とはいうものの、これも「悲観」の中国語化の結果に過ぎない、数こそはそれほど多くはないが、下記用例(23)、(24)のように、二十世紀初め頃の中国語資料に動詞の「悲観」も確実に存在していたのである。

(23) 犬養毅又曰世人動以財政滅亡，悲観中国之前途。

(犬養毅氏之中国時局談『申報』一九一二年四月八日)

(24) 要離断臂，為列国時英雄故事。豪傑悲観其中情節，有可敬可愛可歌可泣者。

(新新舞台新戲廣告『申報』一九一二年六月十六日)

中国語にはかつて存在していたのに、なぜ動詞の用法は消えてしまったか、偶々の出来事かそれとも何か必然的要因があるか、当分不明である。

## 8 まとめ

仏教の中国伝来に伴い、訳経僧の手によって「悲観」という言葉が生み出され、仏教における本義は「あわれみいたむ心で衆生を見て、その苦を取り除くこと」である。仏教の經典に「悲観」があるため、一部の先行研究では「悲観」(失望する)を仏教借用語と見なしている。今回の考察を通して、現代日中両国語における「悲観」は「～を悲しく観る（感じる）」という漢字意識で新しく造語された和製漢語であり、偶々仏教の「悲観」と字面が一致しているに過ぎず、影響関係はない。

確かに近代において西洋由来の新知識を吸収するために、「障碍」「普遍」「普通」などの仏教由来漢語が新しい意味を付与され、近代新漢語に成り得た。しかし、仏教由来新漢語の成立に一つ的前提があると考えられる。それは古代漢語、あるいは古典日本語において一般語彙に転用されること、この過程がなければ仏教における本義と近代的概念とが繋がらない。本論文は「悲観」の語誌を究明すると共に、改めてこの仮説を立ててみたいと思う。

和製漢語の「悲観」が中国語に輸入された当初、近代日本語において成立した用法も併せて中国語にもたらされてきた。しかし、日本語と中国語はそもそも文法体系が違うため、必然的に齟齬が生じてしまう。そのため、自然淘汰を経て現代中国語と日本語における「悲観」は意味こそ同じではあるが、用法の面においてれっきとした違いを見せている。いわゆる全般受容から中国語化という現象である。

本論文は和製漢語「悲観」の成立、中国への輸入を考察するとともに、中日比較言語学の視点から、中国語における「悲観」の受容、変貌にも触れておいた。紙幅の都合で、哲学用語としての「悲観」、「悲観」と「楽観」の組み合わせなどに考察が及ばなかった。これらを今後の課題としておきたい。

## 注

- (1) 羅竹風『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社 一九八六）第一〇一七七頁。  
『漢語大詞典』の記述を引用する時に、中国の簡体字を日本の漢字に書き直す。「饒」「們」のように現代日本語で使わない漢字を異体字で示す。以下同様。
- (2) 本論文ではJapanKnowledgeに収録された『日本国語大辞典第二版』（小学館 二〇〇二）を利用する。
- (3) 五種の観法のこと。（真観、清浄観、廣大智慧観、悲観、慈観のこと）
- (4) 中国佛教文化研究所『俗語佛源』（天津人民出版社 二〇〇八）第二〇三頁。
- (5) 高名凱、劉正垵『漢語外来語詞典』（上海辞書出版社 一九八四）第二十八頁。
- (6) 黄河清『近現代辞源』（上海辞書出版社 二〇一〇）第三十四頁。
- (7) 沈国威『新爾雅 附解題、索引』（上海辞書出版社 二〇一一）第三頁。
- (8) 『近現代辞源』（二〇一〇）では梁啓超が一九〇四年に書いたものとされるが、本当は一九〇三年に書いたものである。
- (9) 楊森林「虚無主義的歴史流变与当代表現」（『學術大視野』二〇一五年五月下）第七十七頁。
- (10) 楊哲「“虚無党”話語在中国：從传入到傳播（1900～1930）」（『現代哲学』二〇一六（六））第四十九頁。
- (11) 沈国威『近代中日語彙交流研究 漢字新詞的創制、容受与共享』（中華書局 二〇一〇）第四三七頁、第四三九頁。
- (12) 胡新祥「「故障」と「障碍」から見る日本語の中国語に対する影響」（『立教大学日本文学』二〇一九年第一二二号）
- (13) 「結構助詞」の用語は『現代漢語欧化語法現象研究』（賀陽 二〇〇八）より引用する。  
賀陽『現代漢語欧化語法現象研究』（商務印書館 二〇〇八）第一六九頁。
- (14) 稲垣智恵「近代日中における接尾辞「的」の受容」（『東アジア文化交渉研究』二〇一〇年第三号）第二九二頁。
- (15) 稲垣智恵「近代日中における接尾辞「的」の受容」（『東アジア文化交渉研究』二〇一〇年第三号）第二九八頁。
- (16) 賀陽『現代漢語欧化語法現象研究』（商務印書館 二〇〇八）第一六九頁～第一七四頁。  
“de”在書面上的分化
- (17) 陳力衛「漢語欧化過程中的日語因素」（『文匯報』二〇一八年一月五日第W03版）文匯学人、  
專題

（こしんしょう 西安理工大学 人文与外国語学院 日本語学科）